

# 技術者からの視点

●第16回●

## 疑って読む

藍野大学非常勤講師 木下 親郎

著者の情熱的文章に出会うと  
素直に受け入れてしまう

本や雑誌、新聞を読んでいると、私のよく知っている事柄が誤って述べられたり、あるいは表現が正確でなかったりするのに出くわすことがある。

したがって、私の知らないことを書いている記事は「疑って読む」ことにしている。しかしながら、まったく知らない事柄でも、感動的な写真がたくさんあり、筋道の通った説明があり、さらに著者の情熱が感じられる文章に出会うと、それを素直に受け入れてしまうものだ。

子供は銃を持ったときに  
大人になる

四〇年も前のことになるが、オーストラリアに出張した際、航空機内の雑誌棚に置いてあった月刊誌ナショナルジオグラフィック(NG)誌を手にしたときがそうだった。巻頭に私の知らない現代アフガニスタンの記事があった。ザヒール・シャー国王の時代から陸路カブールへ向かい、さらにカンダハル、バミヤン、ヘラートなどの主要都市のほか、周辺諸国との国境地帯にも足を延ばしている。国王や皇太子に会ったときの写真やバミヤン大仏の写真もあった。パキスタンと

日本は  
でんぐりがえっている

の国境、カイバル峠では、英国人と戦った老兵の言葉「子供は銃を持ったときに大人になる」を紹介している。私のアフガニスタンについての知識はアレクサンダー大王やシルクロード程度であり、そこに書かれていることに驚き、新知識として詰め込んだ。ベトナム戦争のテト攻勢の後だったので、墜落した米軍パイロットを、地上砲火にさらされながらヘリコプターで救出する記事もあった。私は、未知の世界を教えてくれる雑誌に出会ったと感激して、帰国後購読を始めた。

大阪万国博覧会の年、一九七〇年三月号には、アフガニスタンを書いた記者による「Kansai 関西」という記事が載った。彼は、京都の旅館を足場として三カ月間、関西を歩き回った。「日本はでんぐりがえっている。部屋では靴を脱がねばならないが、帽子を脱ぐ必要が無い。風呂桶の中で体を洗ってはならない」など、外国人が日本について語る一般的な日本紹介から始まるが、「正直に言って日本語は難しい、しかし日本人にとっても」と記し、「キャバレーの女性は服さえ用意すれば、訓練無しで始められるジョブであるが、芸者は早朝からの厳しい訓練の積み重ねによるキャリアである」などと更に踏み込んだ記述があった。

著者は日本語教育や職業人教育など今日の日本が抱える問題点を感じ取っていた。著者は優れた写真家でもあるので、大徳寺で書を書く僧や、大台ヶ原の山中で出くわした山伏の写真を含め、禅寺、熊野古道、茶道などの伝統的な日本から家電、製鉄、造船の最先端の現場までを見事な写真とともに語っている。私は関西生まれであるが、彼の記事に満足した。

NG誌は、私の専門領域の事柄でも、間違っていると思ったことがないので、他の記事も安心だろうと考えて、現在も定期購読を続けている。

### 前提条件が明確でなければ 参考にはできない

実は、技術論文では「疑って読む」という姿勢は普通のことである。論文の内容に間違いがあると、著者は技術者生命を断たれることにもなりかねないので、正確さに最も重点を置いて論文を作成する。さらに雑誌の査読委員が論文掲載の妥当性を厳しく審査するので、権威のある雑誌に掲載された論文の内容は信じてもいいようであるが、それでも、読むほうは疑ってかかるのである。というのも、その資料が参考になるだろうと思うから読むのであって、読者は前提条件、問題処理の手法、結論の全てについて精読する。結論が素晴らしくても、前提条件が明確でなければ、

参考にはできない。データの詳細やその処理について調べると、著者が出した結論は、特殊な領域でしか成立しないものであることがある。技術論文を読むときの基本的な姿勢は、「疑って読む」ことである。

### 次世代大型天体望遠鏡のみならず 最新の観測技術の紹介記事までが

ところで、NG誌を出版しているのは米国のナショナル・ジオグラフィック・ソサイエティ(NGS)という非営利協会である。一八八八年に地理学の普及を目的としてワシントンで設立された。電話の発明者グラハム・ベルが長期間会長を務めていた。山本五十六元帥も定期購読者であった。毎号、素晴らしい写真を豊富に用いた地理、歴史の記事が掲載されているが、科学や環境問題などの硬い記事も多い。毎月九〇〇万部近く発行され、一五〇〇万人が読んでいるという。二〇〇九年七月号ではユーゴスラビア時代にクロアチア、ボスニア、コソボなどの連邦各地に散らばって行ったセルビア人の近況を取り上げている。また、ガリレオから始まる天体望遠鏡の歴史を、スバル望遠鏡などの現役の望遠鏡に止まらず、五年から一〇年先にならないと完成しない直径三〇メートルを超す次世代大型天体望遠鏡まで含めて紹介している。大気層での光の乱れを取り除いて鮮明な星像を得るための、レーザ光線を用いた最新の観測技

術の説明もある。多くの米国人がこれらの記事を読んでいるに違いない。日本のマスメディアによって紹介される米国は、NG誌の読者層とは無縁の米国のようだ。我々は米国にはNG誌を支える市民層があることを忘れてはならない。



### NGSの手本になったのが 英国王立地学協会

NGSの手本になったのが、一八三〇年創立の英国ロイヤル・ジオグラフィカル・ソサイエティ(RGS・王立地学協会)である。ダーウィンの航海、リビングストン、スタンレーのアフリカ探検、スコット、シャックルトンの南極探検、ハント、ヒラリーのエベレスト登頂などを支援している。ウインパーの『アルプス登攀記』の出版もRGSの支援を受けた。RGSは学会的性格が強いので会員は一万五〇〇〇人程度であるが、一般人を対象とした行事を手広く行っている。RGSの月刊誌ジオグラフィカルは毎号優れた記事を掲載している。協会や雑誌の呼び方が英国と米国で異なるのは面白い。